

Title	書物を追う楽しみ
Sub Title	Pleasure of hunting for books
Author	大木, 康(Oki, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2011
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.46 (2011.) ,p.31- 37
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫開設五十年記念講演とシンポジウム古典籍の探求 : 書誌学の世界
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20110000-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書物を追う楽しみ

大木 康

大木でございます。

斯道文庫開設五十年というこのおめでたい日のシンポジウムにお招きいただき、たいへん光栄に存じます。

はじめに心より斯道文庫開設五十年のお祝いを申し上げます。

わたしは中国文学、なかでも明末清初という時代の文学作品を中心に勉強しております。明末清初の時代は、印刷された書物がたくさん出された時代です。そして、これらの書物が海を渡って日本にも伝わってきています。いま日本で漢籍を多く持っている図書館で、その漢籍蔵書は、この明末清初、あるいはそれ以後に刊行された書物が相当多くを占めていると、いいと思います。

書物がたくさん印刷されて出るようになってまいりますと、それまでは印刷出版されることがなかったような種類の書物も出されるようになってきます。みなさんもよくご存じの『三国志演義』や『水滸伝』、『西遊記』などいわゆ

る白話小説の作品も、この時代の出版ブームを背景にして、いまある形に定着したものです。

わたしはこの明末の時代に蘇州で活躍した一人の文学者、とりわけ、戯曲小説や通俗歌謡の編纂出版に活躍した馮夢龍（一五七四―一六四六）という人物に興味を持って、本を読んでまいりました。馮夢龍はたくさんの著作を残しておりませんが、日本では「三言」と総称される短篇白話小説集で最もよく知られます。「三言」のうちのいくつかの作品は、上田秋成の『雨月物語』の原拠にもなっています。

さて、本を読むのであれば、どのような形で読んで下さるようなものです。昨今は電子書籍が話題になっておりますが、まあ文字を目で追っていただくのことならば、明代の書物を、当時出たままの書物で読むのではなく、最近出版された活字本で読んでも、コンピューターの画面で読んでも、同じことでありましょう。

ところが、それではいかんのだと、わたくしは、この馮夢龍と出会った最初の瞬間に痛感させられたのであります。わたしは、大学に入った年の後期、馮夢龍が編纂いたしました「三言」の一つである『醒世恒言』に収められる「油売りが花魁を独り占めする」という物語にめぐりあいました。それは、当時東大駒場で中国語をお教えいただいた伊藤藤敬一先生が、一種の自主ゼミのような形で開いてくださった授業の折でした。

貧しい油売りの青年のまごころが高嶺の花ともいえる花魁の心をとらえ、最後に結ばれる物語は、いまでも馮夢龍の作品の中で最も好きな作品の一つですが、この時のゼミがわたしと馮夢龍作品との最初の出会いでありました。これがきっかけになって、わたしはこの馮夢龍という人物に魅せられ、学部の卒業論文にはじまり、修士論文、そして学位論文、さらにその後、今日に至るまで、この人物とその作品に関する読書が続けております。馮夢龍には、蘇州地方の民間歌謡を、当地の言葉である蘇州方言のままに記録した歌謡集『山歌』があります。その『山歌』に関して

が、わたしの学位論文です（『馮夢龍『山歌』の研究』として公刊。勁草書房 二二〇〇三）。馮夢龍その人と作品についての研究ばかりではなく、例えば明末の出版研究にしても、後で触れますような妓女研究にしても、わたしの中国文学研究は、実はすべてこの馮夢龍研究から出発しているのです。

それはさておきまして、このゼミは初学の学生向けのゼミでしたので、革命後の中国で出された活字本をテキストに使っておりまして。読んでまいりますと、わたしのようなものでも、どうもおかしいなと思うところがありました。それに加えて、この本はそもそもどのような形で世に出たのだろうかといった興味もあって、本郷の方に参りまして、古い刊本を見て、活字本と文字を比べてみたのです。そういたしましたら、これはたいへん。活字本で読んで、おかしいな、と想像していたところに、刊本の方には、何と申しましょうか、色っぽいと申しましょうか、艶っぽいと申しましょうか、つまりは濡れ場の描写があったわけです。中国大陸で新しく出た活字本では、このたいへん大事なところが削除されていたわけです。

これはたいへんだ、けしからん、というわけで、やっぱり昔の本を読む時には、もとの刊本を見なければ、あぶないことになる。きちんと古い本で読まないで、損をしてしまう。そんなことを痛感したわけです。

幸い東大には、文学部の漢籍コーナー、総合図書館、それから東洋文化研究所などがあって、中国の古い本をたくさん持っており、そうした書物に直接触れる機会に恵まれました。

先ほど、明末清初以降の本はたくさんあると申しました。明末清初と申しますと、明王朝が滅んだのが一六四四年のことですから、それでも今から三百五十年以上前のものです。そんな時代に出た本ですから、どの本でももちろん貴重なのですが、明末以降の本はたくさんあるので、図書館でもかならずしも貴重書の指定を受けません。ですから、

見たいと思えば、学部 of 学生でも手にとって見る事ができたのです。

駒場から本郷の文学部の中国文学科に進学しまして、この漢籍コーナーというところに入りびたりました。何といつても、昔の本の実物にさわる事ができる。それが何よりの贅沢であり、楽しみであり、喜びであつたわけです。

今年の春、『冒襄と『影梅庵憶語』の研究』と題する本を出しました(汲古書院 二〇一〇)。冒襄(一六一一〜一六九三)もまた明末清初に活躍した文人で、『影梅庵憶語』は、その冒襄が、南京秦淮の妓女で、後にその側室になつた董小宛という女性の思ひ出を、彼女が若くして亡くなってしまつた後に記した作品です。これを読むと、当時の文人の生活、妓女の生活が手に取るようによくわかるのです。

実はわたくしと『影梅庵憶語』との出会いも、馮夢龍にはじまるものです。先の「油売りが花魁を独り占めする」の物語もそうなのですが、馮夢龍の作品には、小説集「三言」にしても、あるいは歌謡集『山歌』にしても、しばしば妓女が登場します。そこから、当時の妓女の状況について調べる必要が出てきた。そこでこの『影梅庵憶語』という一級の資料を見つけたわけです。読んでみますと、単なる資料としての性格を越えて、その作品、文章自体に魅せられ、ある意味馮夢龍研究からの横道ではありますが、冒襄、『影梅庵憶語』にのめり込んだ次第です。

この冒襄という文人について調べていく過程で、冒襄には、一生の間に人から贈られたり、友人たちといつしよに作つたりした詩文を集めた『同人集』という珍しい詩文集があることがわかりました。これを読みますと、冒襄の人間関係、実際の具体的な様子がよくわかる。ところが、この本が、当初、日本ではどこにもあるという本ではありませんでした。

一九九三年に在外研究の機会を得まして中国に参りました。そこでこの『同人集』をさがしたのですが、まずは上

海師範大学の図書館で、実物の刊本を見せてもらうことができませんでした。ところが、写真にとることができず、必要な部分を必死になって筆写しました。もちろん、筆写できたのは、ごく一部に過ぎません。その後、香港の中文大學に行く機会もあったのですが、そちらの図書館に清末の版本があり、これはコピーをとることができまして、とりあえず必要と思われるところのコピーをとりました。全部ではないにしても、相当な分量になりました。

そしてその年、今度は北京に行つて、琉璃廠の古書店街を歩いておりますと、何と、この『同人集』が売りに出たのです。かくして遂にそれを自分自身で手に入れることができました。本についても必ず神様がいて、ほしいほしいと思つておりますと、そういう本にはきつとめぐりあえるわけです。

その後、日本の公蔵の図書館にも所蔵されていることがわかりましたし、さらに最近には『四庫全書存目叢書』に入りまして、より簡単に見られるようになりました。ところが、この『同人集』にしても、これまで見てきた版本の中には、例えばある人の序文があつたりなかつたり、あるいは序文の順番がちがつたり、一つとして同じ版本はありません。やっぱり実物を見てみないとだめなのです。それが漢籍の面白いところですよ。

実際何かある本が見たいと思ひますと、たとえ遠くの図書館のものであつたとしても、どうしても見に参ります。あるいは昔であれば、例えばパリにあることがわかつて、ふらんすはあまりに遠しというわけで、あきらめて論文を書くしかなかったのかもしれない。ところが、それこそこれがグローバリズムなるものではないか、これだけ地球が小さくなり、便利になつてしまひますと、もはやパリにあるのがわかつていけるけれど、遠いから見られない、とはいえなくなつていられるのかもしれない。

ただ、われわれにすれば、見たい見たいと思う本を、何とかして見に行くこと、これこそが楽しみなわけで、見た

い本をわくわくしながら見に出かけて行く気持ちは、まさしくデートの時の気持ちなのだろうと思います。

昔、静嘉堂文庫におじゃまさせていただいた時、米山寅太郎先生が、たとえどんなに遠くへでも出かけて行って本を見る習慣は、若いうちにつけておかないとだめですね、とおっしゃられたのをよく覚えております。こういう楽しみも、一種習慣から生まれるものでしょう。

尊敬おくあたわざる斯道文庫の先生方は、まさしくこういった楽しみを身を以て実践しておられる先生方です。書痴というのでしょうか。もちろん最大のほめ言葉として申しております。

さてわれわれがやっているのは、学問といえば学問なのですが、その根本は、実はいま申し上げましたような楽しみにほかならないわけです。世の中には、本の追っかけ、とでも申しましょいか、そんな楽しみがあって、それに人生をかけて夢中になっているものがある。そんなことを知っていただければ、あるいはこうした楽しみを共有していただければ何よりと思います。

もつとも、わたくし、図書館は静かな方が好きなので、あんまりみんなが図書館に殺到するようになってもいいけません。知る人ぞ知る楽しみ、といったあたりがちょうどよいのかもしれない。

最後に、先ほど少し触れたことですが、例えば四百年前、あるいは千年前にできた本を、いま現在手に取ってみることができるのは、奇跡に近いたいへんなことなのだろうと思います。本も物である以上、滅びうるものです。実際、火事や水害などにあつて、消えてしまった書物は数知れません。しかし、いま目の前にあつて、これから読ませてもらおうとしている本が、そういった長い歳月を経て、現在まで伝えられているのは、それを残そうと努力した人々があつたからこそです。われわれは、常にそのことを忘れてはならないのだと思います。

斯道文庫は、古典籍の研究を目的に作られた専門の研究機関、つまりは、昔から伝えられた書物をさらに将来に向かつて伝える努力を重ねている機関といつてまちがひありません。

そうした斯道文庫のますますのご発展を祈りつつ、拙い話の結びとさせていただきます。ご清聴ありがとうございます。ありがとうございました。

(本稿は当日の講演原稿をもとに手を加えたものです。大木記)